

強調と対人関係の関わり —母音の延伸を中心に—

The Relationship Between Emphasis and Interpersonal Relations —The Case of Vowel Lengthening—

韓 旻池[†]

Minji Han

[†] 京都大学大学院

Kyoto University

han.minji.53s@st.kyoto-u.ac.jp

概要

「強調」とは、メッセージの内容に関わる行為であるため、対人関係と関わりがないことが予想される。しかし実際には、強調発話は対人関係に関わる面を持つ。本発表では、明確な上下関係にある上位者に対して、下位者の発話では母音の延伸を伴う強調が現れにくいことをコーパスを通して検証する。また、母音の延伸による強調が上位者への発話で現れにくい理由について考察する。結論としては、本発表では、上位者への発話で母音の延伸による強調は現れにくく、その理由として、余剰的な卓立強調に見える形式が、下位者が上位者に対して発話のターンを主張するという好ましくない発話態度を取ったような誤解を招きうるためだと説明する。

キーワード：自然発話音声、強調、対人関係、ポライトネス

1. はじめに

「強調」とは、メッセージの内容に関わる行為である。強調は、強度強調(intensity)と卓立強調(prominence)の二つに分けられる[1]。強度強調は語の表す意味の程度が強められることを指し、卓立強調は文の中の一部を、聞き手に強く訴えたいなどの理由で、相手が聞き落としたり聞き間違えたりしないように、周辺と違って目立たせることで、はっきりと伝えることである[2][3]。強調の定義から考えられるのは、強調は語の意味の強化やフォーカスなどメッセージの内容に関わっており、卓立強調をより広く捉え伝達に関わっているとしても、「対人関係」とは直接的に関わらないということである。

ところが実際には、強調は対人関係に関わる面と持っている。具体的に言えば、現代日本語共通語では、「ながーい」といった母音の延伸による強調は、上下差の大きな権力関係における下位者から上位者への発話では現れにくいようである。大学生の日本語母語話者若干名に対する予備的な聞き取り調査では、「教師(上位者)に対する発話では母音の延伸を伴う強調はしにくい」「教師と親しい関係になり上下差が縮まると延伸

を伴う強調の困難さは軽減される」という結果が得られた。

本発表では、強調と対人関係の関わりを考察するため、現代日本語共通語を対象に用いる。まず、強調と対人関係が関わりを確認するために、「上下差の大きい明確な上下関係では、上位者への発話で母音の延伸による強調が現れにくい」という仮説が、実際に成立するかをコーパスから確認する。以上の仮説が成立する場合、「母音の延伸による強調発話は、コミュニケーションの中で、どういった特徴を持つため、対人関係に影響されるのか」について考察する。考察を行う上で、母音の延伸による強調発話が対人関係に影響される理由を説明しうる以下の二つの仮説を検討する。

- 説明仮説 1. 母音を伸ばす強調発話が、インフォーマルな特徴を持っているためだ。
- 説明仮説 2. 母音を伸ばす強調発話が、インフォーマルな特徴を持つという説明は不十分で、その他の要因がある。

2. 強調は対人関係と関わりを持つのか

2.1. 手法

強調と対人関係の関わりを示す仮説「上下差の大きい明確な上下関係(以下、明確な上下関係)では、上位者への発話で母音の延伸による強調が現れにくい」の確認には、『日本語日常会話コーパス』を用いた[4]。幅広い場面・年齢・話者数での日本語日常会話を収録した、国立国語研究所の200時間分の動画付きコーパスである[4][5]。仮説を確認するための実例の収集には、コーパスの提供する検索ソフト「Himawari(ver. 1.7.1)」を活用した。

明確な上下関係にいて、強度強調の母音の延伸が現れる例を探すために、検索条件を絞った(表1)。上下関係がはっきり捉えられ、対話相手の権力的な影響が極大化されるように、二人の話者による1:1会話に限定した。母音の延伸は、「非語彙的な母音の引き伸ばし(:)」という転記テキスト上のタグで捉えた。この母音の延伸は、強調、考え、ためらいなど多様な状況によるものを含むため、中でも強調による発話を判別する必要がある。そこで、強調(特に、強度強調)の判別が容易で、強調による実例が多く見られると思われる「形容詞」に品詞を限定した。

表1 仮説の確認のための検索の詳細

検索意図	検索条件	検索内容
権力関係の強い影響	話者数	2
母音の延伸	S書字形(タグ付)	:
容易な強調確認	S品詞	形容詞-一般

その結果、二人の対話参加者による全280会話のうち、280会話における13045件の形容詞発話から、母音の延伸を伴う199会話における662件¹の発話が検索された。

次に、検索された199会話における話者間の上下関係の有無を確認するために、丁寧語の使用に注目した。「タメロ—タメロ(関係1)」「タメロ—丁寧体(関係2)」「丁寧体—丁寧体(関係3)」に分けた。二人ともタメロで話す場合は、話者間に権力的な上下関係がないことの表れだと判断し、片方がタメロ、もう片方が丁寧体で話す場合は、話者間に権力的な上下関係があることの表れだと判断する。そして、両者とも丁寧体で話す場合は、上下関係がないかほぼ同等な関係にある可能性と、上下関係がある可能性の両方が存在する。しかし、丁寧体で話し合う二人の上下関係の有無を判断することは、観察者の立場では難しく、メタ情報を参照した精査を必要とするため、本発表では関係3は取り扱わずに観察を保留する。以上の分類による結果を表2に示す。

表2 丁寧体の使用に基づいた話者数2の会話の分類

二人による会話		
丁寧体の使用	形容詞+母音の延伸	形容詞
全会話	199 会話	280 会話
	662 件	13045 件

¹ 重複結果を含む。一つの語が複数の延伸を含む場合、延伸の数だけの結果が重複して現れる。

ため口—ため口 (関係1)	127 会話 389 件	186 会話 8525 件
ため口—丁寧体 (関係2)	39 会話 149 件	47 会話 2533 件
丁寧体—丁寧体 (関係3)	33 会話 124 件	44 会話 1962 件
不明		3 会話 25 件

上下関係が予想される関係2を対象に観察を行う。ただ、会話のうち、基本的には丁寧体を用いるはずの下位者が、はっきりとした声で(1)を発話する場合は、上下差が大きい関係と見なし、仮説にそぐわない例として、考察対象から除外する。

- (1) a. 「うんうん」という相づち
- b. 名詞または動詞辞書形終わりの質問
- c. タメロ発話

2.2. 結果

関係2の会話のうち、(1)を発話しない下位者により母音を伸ばした発話が見れるのは、2会話のみであった。それぞれ2件ずつ計4件の発話が見られたが、どの発話も強調の状況での延伸ではなかった。結果的に、(関係3を除く発話の中では)明確な上下関係にある話者間では、下位者が上位者に対して母音の延伸による強調を発する例は見られなかった。

表3に該当する会話の情報、母音の延伸を伴う発話数、延伸の予想される生起状況を示す。

表3 明確な上下関係を持つ関係2における母音の延伸数と生起状況

会話ID	T009_021b	T010_009
母音の延伸発話数	3	3
└上位者の発話	1	1
└下位者の発話	2	2
強調の母音の延伸数	0	0
母音の延伸の生起状況	笑い ためらい	笑い ためらい

以下の(2)から(5)に、明確な上下関係での下位者による形容詞の母音の延伸発話を提示する。4件とも強調の状況で生じた延伸ではないと考えられる。状況は、動画と音声を用いて、話し手の身体の動き、前後文脈、音声のプロソディ的な特徴などを多角的に観察し判断している。テキストはコーパスの提供する転記テキストを示しており、下線は発表者による。テキスト上のIC0Xは各会話ごとに話者を同定する固有IDであり、テキストで用いられたタグは付録1に示す[5]。

T009_021bは、飲食店で先輩のIC01が後輩のIC02に業務の引き継ぎをしている会話である。(2)は、IC01が用がある時に電話を好む人がいると言うと、IC02がその人の名前を言及した直後の対話である。転記テキストには「怖い:」に笑いを示すタグ「L」が付いていないが、音声では笑いで声の最後が震えており、IC02の発話直後の顔を見ると笑みを浮かべていることが確認できる(図1)。

(2) T009_021b 笑いの母音の延伸

IC01 そう / (G そう | そ) / (G そう | そ) / (G そう | そ) / そう. //

IC01 怖い / 人. //

IC02 はい. //

IC01 は / 電話 / で / 来 / た. //

IC02 怖い. //

IC01 この / 日 / だい / じょ / ぶ / だ / から / (D ハハ) / は / い / (L みたい / な). //

IC02 (D ン) / 怖い:. //

IC01 (L ◇) //

IC01 (L ◇) //

IC02 怖い. //

IC01 突(K ゼ:ン然) / みたい / な. //

IC02 (U 怖い). //



図1 IC02の「怖い:」直後の時点の画像

(3)は、ためらいの母音の延伸の発話例である。転記テキスト上には現れていないが、IC02の発話は、直前にある先輩IC01の「市役所味方に付つくと」の直後にややささやくような声で発されている。次に来る先輩の言葉を予想している話しているため、確信なくためらい気味に発話したと判断した。

(3) T009_021b ためらいの母音の延伸

IC01 うん. //

IC01 まあ / 仲良く / し / て / くれる / と / 思う. //

IC01 ただ / その / 仲良く / し / たい / ね / って / ゆう / 方 / 針 / に / なる / か / どう / か / も / あなた / (D タ) / たち / 次第 / な / の / で / それ / は / まあ / まあ / お / 任せ / します / が: . //

IC02 はい. //

IC02 はい. //

IC01 市 / 役所 / 味 % 方 / に / 付ける / と / 何 / か / と / 強い: / と / 思 / い / ます. //

IC02 (U 強い:). //

IC02 そう / です / ね. //

IC01 うん. //

次のT010_009は、大学の部屋(先生の研究室だと推定)で大学生のIC01がゼミの先生であるIC02と、送別会の計画について話す会話である。(4)は、送別会で渡すプレゼントとして花束を提案した先生IC02の提案に、学生のIC01が異論を述べる場面である。前後文脈でIC01困った気配が感じられることから、先生の意見を否定する状況になり、学生として負担を感じてためらい気味に話していると判断した。

(4) T010_009 ためらいの母音の延伸

- IC01 一/個/は/隠し/切れ/ます/けど. //
- IC02 うん/うん/うん. //
- IC01 十/個/は/隠し/切れ/ない/ん/で. //
- IC02 なるほど. //
- IC01 はい. //
- IC01 で/あ/と/あんまり:/お/め/で/と/う/で/は/は/ない/気/が/が/(L する/ん/す/よ/ね). //
- IC01 なん/か/(D コン)/追/い/コン/で/は/ある/ん/です/けど. //
- IC02 うん. //
- IC01 お/め/で/と/う/ご/ざ/い/ま/す/あ/り/が/と/う/ご/ざ/い/ま/し/た/が/(W チッ/ち/よ/つと)/強/い:/気/が/が/する/ん/す/よ. //
- IC01 花束/っ/て. //
- IC02 うん. //
- IC01 (G いや/や). //
- IC01 (G まあ/ま)/確/か/に:/頑/張/っ/て/く/だ/さ/い/な/ん/す/(L けど). //
- IC02 いや. //
- IC02 お/め/で/と/う/で/い/い/ん/じ/や/な/い/の?. //

(5) は、先生である IC02 の送別会に行く前にもう一回ゼミをしようという冗談に、IC01 が反応する場面である。「きつい」という発話にタグで見られるように笑いを伴っている。

(5) T010_009 笑いの母音の延伸

- IC01 (L それ/は/それ/は). //
- IC02 エクセル/と/か. //
- IC01 (L ◇)///
- IC01 (L エクセル). //
- IC01 (L ◇)///
- IC02 V/ル/ック/ア/ッ/と/か?. //
- IC01 エクセル/道/場/(L と/か/や/り/ま/す/か)?. //
- IC02 (L ◇)///
- IC01 (L ◇)///
- IC01 (L その/イ/ベ/ン/ト/は/ち/よ/つと). //
- IC02 エクセル/道/場/や/る/か?. //

IC01 きつ(L い). //

IC02 (L ◇)///

IC01 (L きつ/い/です/ね). //

IC01 (L ち/よ/つと). //

以上、『日本語日常会話コーパス』の検討結果、明確な上下関係では、下位者が母音の延伸を発することはあるが、強調による延伸は見られないことを確認した。

2.3. 考察：仮説どおりの現象、二つの疑問

現代日本語共通語では「上下差の大きい明確な上下関係では、上位者への発話で母音の延伸による強調が現れにくい」。このことから二つの疑問が生じる。

一つ目の疑問は、通説との不一致に関する疑問である。通常「丁寧度が上がれば、文は長くなる」と長い表現と丁寧度の比例関係が言われている[6]。しかし、コーパスの結果を見ると、高い丁寧度で話すべき下位者の発話では、文が時間長的に長くなる母音の延伸は現れにくい。このことから考えられるのは、先行研究における丁寧度と比例関係にあるのは、形態素が増すという「統語的な文の長さ」で、「時間長的な文の長さ」ではないということである。統語的な文の長さ（強調の母音の延伸による）時間長的な文の長さがなぜこのような関係にあるのかに関しては、第4節で述べる。

二つ目の疑問は、概念上の不一致に関する疑問である。既述のとおり、強調は主に発話の内容に関わっている行為で、対人関係と直接的な関わりを持っていない。しかし、対人関係によって母音の延伸による強調発話が現れにくくなることがある。

母音の延伸による強調発話は、コミュニケーションの中で、どういった特徴を持つため、対人関係に影響されるのだろうか？ 母音の延伸による強調発話が対人関係に影響される理由を説明する仮説を以下のように設定した。

- 説明仮説 1. 母音を伸ばす強調発話が、インフォーマルな特徴を持っているためだ。
- 説明仮説 2. 母音を伸ばす強調発話が、インフォーマルな特徴を持つという説明は不十分で、その他の要因がある。

次の第3節では、説明仮説1のみで十分な説明がなされるのか、これら二つの仮説のうち、どちらがより妥当性が高いのかを検討する。

3. 対人関係と関わる強調の特徴は何か

3.1. 手法

説明仮説1は、母音の延伸による強調がインフォーマルな発話であるため、フォーマルな発話を要求する上位者への発話では言いにくいというものである。説明仮説1が妥当であるのか確認するために、母音の延伸による強調発話とフォーマルさの共存する二つの可能性について検討した。

一つ目の可能性は、母音の延伸による強調とフォーマルな文体の共起可能性である。フォーマルな文体とされる敬語の「です」との共起可能性を同コーパスから確認した。話者数は制限せず、形容詞の母音が非語彙的に伸びており、「です」が後続する例を検索した(表4)。

表4 強調の母音の延伸とフォーマルな文体の共起可能性を確認するための検索の詳細

検索意図	検索条件	検索内容
母音の延伸	S 書字形 (タグ付)	:
容易な強調確認	S 品詞	形容詞-一般
「です」の後続	S 語彙素1	です

二つ目の可能性は、母音の延伸による強調が、上位者への発話以外の、フォーマルな発話態度が予想される別の発話において現れる可能性である。フォーマルな発話態度が要求される発話として、演説・講演などのスピーチを選定した。話し手が丁寧体で話し、発話中に一定の緊張状態に置かれ、慎重に発話するという点で、上位者への発話と共通していると判断した。講演・演説のスピーチで、母音を伸ばす強調が現れるのかを検討した。

3.2. 結果

表4の検索条件で検索した結果、母音が伸びた形容詞に語彙素「です」が後続発話は35件(重複なし)見つかった。そのうち、強調による延伸も確認できた。このことから、「強調の母音の延伸はフォーマルな文体と共起する」ことが確認できた。

一方、演説・講演などのスピーチにおける強調の母音の延伸の生起可能性については、生起しうると考えられる。コーパスでの事例の検討はしていないが、スピーチでの話し方を教える動画・本を見ると、大事なところではゆっくり話すように教えている[7]。ゆっくり話すことと母音の時間長が長くことは同じ現象ではないが、ゆっくりとした発話は母音の延伸を伴うことが多い。なお、「大事なところ」という表現は、卓立強調の対象とされるフォーカスの置かれる部分を意味しているため、強調の延伸が現れていると言える。強度強調の延伸が講演・演説で現れることも想像に難くない。

(6) (講演で自分が行った研究を紹介しながら)

X: 実験のためにAグループには普通の机を,
Bグループにはながーい机を置いて観察
しました。

(6)の作例では、講演のスピーチに強度強調の延伸が含まれているが、自然な発話に感じられる。ただ、スピーチ技術講座が教えているように、講演・演説などで現れる母音の延伸を伴う強調発話は、同時にフォーカスの置かれた卓立強調の発話でもあり考えられる。

以上、母音の延伸による強調が、フォーマルな文体と共起し、フォーマルな発話で用いられることを確認した。この結果は、母音の延伸による強調はインフォーマルで、フォーマルな発話を要求する上位者への発話と相性が悪いという、説明仮説1の妥当性を低め、それ以外の要因があるという説明仮説2の妥当性を高める。

3.3. 考察

仮説2の妥当性が高まったため、母音の延伸による強調が対人関係に影響される(上位者への発話で現れにくい)理由として、フォーマル・インフォーマルの区別のほか、別の要因を想定する必要がある。要因の一つとして、一部の強調発話(強度強調・余剰的な卓立強調)に対応する、現時点での仮説を以下に提示する。

- 説明仮説3. 母音を伸ばす強調発話のうち、余剰的な卓立強調に感じられる発話(音声的な卓立)が、発話ターンの主張のように感じられるためである。

強度強調と卓立強調は、母音の延伸という音声的な卓立を形式として共有する。そのため、話し手が卓立強調を意図していなくても、母音を伸ばす強度強調は、

聞き手にとって卓立強調にも読み取れる形式に聞こえる。すなわち、強度強調と卓立強調が共有する音声的な卓立のもと、強度強調の発話は卓立強調としての印象を副次的に帯びてしまうのである。これはコミュニケーションにおいて、上位者が要求してもいない、対話の文脈上不自然な余剰の卓立強調である。下位者による余剰的な卓立強調は、「この発話を聞け」と、上位者に発話への注目・集中を強いる、自分の発話ターンであることを主張する効果を持ってしまうが、これは下位者の発話態度として好ましくないと考えられる。

なお、強度強調の場合、音声的な卓立を避けられる形式がある。語彙的な強調（例：より強い意味を持つ語彙を用いる）、統語的な強調（例：程度が強いことを意味する副詞を用いる、強調構文を用いる）、談話的な強調（例：発話の繰り返し）である。例えば、上位者への発話で、(2)では「怖い」という発話が繰り返されており、ほかにも「すごく」「とても」などの語彙を用いることも想像に難くない。代案があるにも関わらず、下位者の発話として余計な誤解を招きうる形式を避けないことも、好ましくない発話態度・印象に繋がりと予想される。

上位者に対する下位者の発話で、母音の延伸による強調発話が現れないのは、以上のようなコミュニケーション上好ましくないシナリオを避けようとする無意識の現れだと考えられる。

4. おわりに

本発表では、『日本語日常会話コーパス』における実例の検討により、「上下差の大きい明確な上下関係では、上位者への発話で母音の延伸による強調が現れにくい」ことを確認した。そして、「母音の延伸による強調発話は、コミュニケーションの中で、どういった特徴を持つため、対人関係に影響されるのか」という問いに対する二つの説明仮説を検討した。検討の結果、母音を伸ばす強調発話が、フォーマルな文体及び発話と相性が悪くないことから、説明仮説2「母音を伸ばす強調発話が、インフォーマルな特徴を持つという説明は不十分で、その他の要因がある」の方が妥当性が高いことを示した。そして、その他の要因について述べる説明仮説3「母音を伸ばす強調発話のうち、余剰的な卓立強調に感じられる発話（音声的な卓立）が、発話ターンの主張のように感じられるためである」を提示した。その根拠として、強度強調と卓立強調が音声的な卓立という形式を

共有することと、強度強調には卓立強調との混同を避けられる語彙・統語・談話的存在することを挙げた。

これまでの考察から、母音の延伸による強度強調が上位者への発話で現れにくいという現象から生じた二つの疑問に対して、次のような説明が試みられる。

強調は主にメッセージの内容に関わる行為だが、なぜ対人関係に影響されるのか？母音の延伸を介して余剰的な卓立強調の形式をとる下位者の発話は、上位者に余剰的な卓立強調だと受け入れられる場合、発話への注目・集中を強いるように聞こえる恐れがある。下位者は無意識のうちに、このような好ましくない行為を避けたと思われる。その好ましくない行為は、実は母音の延伸以外の強調法を用いることで避けられたはずだが、それを避けなかったという点が行為をより好ましくなく感じさせたと考えられる。

丁寧度と文の長さは比例するが、なぜ丁寧に話すべき上位者への発話で文が長く発することは控えられぬ？先行研究で丁寧度と比例関係にあるのは、統語的な文の長さで、音声的な文の長さではない。なお、上位者への発話において、余剰的な卓立強調の形式を発して無礼な発話態度だと誤解されることを避けるために、音声的な強度強調を控え、その代案として統語的な強調を用いると、統語的に文の長さが長くなることが予想される。

今後は、今回説明が与えられなかった余剰でない卓立強調についての考察や、余剰的な卓立強調に対する認識を調べるといった日本語母語話者に対する印象評定実験・聞き取り調査を通して、説明仮説3の補強と検証を行いたい。

文献

- [1] Coleman, H. O. (1925). Intonation and emphasis. *Le Maître Phonétique, troisième série*, 3 (40), 6-26.
- [2] 齋藤純男 (2006). 日本語音声学入門【改訂版】三省堂
- [3] 郡史郎 (1989a). 強調とイントネーション 杉藤美代子 (編) 日本語の音声・音韻 (上), 講座日本語と日本語教育第2巻 (pp. 316-342) 明治書院
- [4] 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2022). 『日本語日常会話コーパス』の設計と特徴 言語処理学会第28回年次大会発表論文集, 2008-2012.
- [5] 国立国語研究所. 日本語日常会話コーパス | 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究. <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html> [2021年1月アクセス].
- [6] 井上史雄 (2011). 経済言語学論考 ―言語・方言・敬語の値打ち― 明治書院
- [7] 齋藤孝 (2016). 恥をかかないスピーチ力 筑摩書房

<付録>

付録1 『日本語話し言葉コーパス』タグ一覧
 (『日本語日常会話コーパス』ホームページより[5])

タグ	概要
:	非語彙的な母音の引き伸ばし
%	非語彙的な音の詰まり
(W)	言い誤り・発音の怠け等の一時的な発音エラー
(D)	語の言いさし
?	疑問型上昇調(強調型上昇調は除く)
(T)	小さい声で発話している箇所
(L)	笑いが生じている箇所, あるいは単独の笑い
(C)	泣きながら発話している, あるいは単独の泣き
(S)	歌いながら発話している, あるいは歌詞を伴わない歌
<	発音に類する行為のうち会話の流れに関わるもの
(U)	聞き取りや語の判断が不確かな箇所
(X)	語が不明な箇所
(K)	タグ等のために漢字表記できず可読性が落ちる箇所
(M)	音や言葉自体が言及の対象とされており(W)などで対応すると把握しづらい箇所
(O)	一般的に理解が難しい外国語・方言が用いられる箇所
(B)	喃語・乳児の音声に対してのみ付与する
(Y)	漢字表記の一般的な読みと発音が異なる箇所
(G)	可読性が低い口語表現
(F)	「あの」「その」等がフィラーとして用いられる場合
(I)	「あ」「え」等の感動詞が挿入構造の内部にあり発話単位として分割されていない箇所
.	発話単位末
+	知覚可能な休止により1短単位が分割される箇所
(R)	個人情報などに関わる仮名・伏字処理を行った箇所
@	転記に対するコメント *